

プレングレス  
シンポジウムA

子どもの育つ良い環境づくりへ向けて

1. クリニックの中の絵本

松田 幸久 (まつだこどもクリニック)

I. はじめに

私が小児科医として勤務しはじめてから絵本に出会ったのは、勤務先の小児病棟で小児がんの子どもたちのターミナルケアをはじめからであった。お話ボランティアの女性が、狭いブレイルームに入院中の子どもたちを集めて、月に1回お話し会をはじめたのである。入院中ゲームをする子ども、この時間は生き活きた眼をしていたことを思い出す。感染予防のため個室に入った子どもたちも、参加したくてたまらなく、ボランティアの人をお願いして個室でも絵本を読んでもらった。長期入院を強いられている子どもたちの心理的ストレスははかりしれないが、絵本によって緩和されていたことはまちがいがなかった。

その頃より、絵本については興味があり、自分のクリニックの中を、絵本だらけにしようと思っていた。ここでの絵本は、診察や会計の待ち時間に読んでもらうためのものだ。よく見ていると、本を本棚から出したり入れたりする子どもいれば、ページをめくるのが楽しそうな子どももいる。また、絵本を診察室にまでもってくる子どももいる。絵本1冊を読むのに3分から、長くても15分くらいだ。このわずかな時間だが、子どもたちの眼は輝いている。子どもにとって、大好きな人がそばにいて、自分を愛してくれている人が自分のために絵本を読んでもくれる、そんな時間は素敵なのだなあと実感する。

II. 絵本と子どものかわり

乳児初期にはすでに視覚や聴覚は発達してい

て、この時期から、大好きな人から絵本を読んでもらうという体験をくり返すことが、豊かな創造力や、優しい心を育てていくと考える。そのようなことから、私の住む鹿屋市では、3~4か月健診の時に、家庭での「ブックスタート」の参考になればと、「0歳~3歳のための絵本ガイド」というパンフレットを配っている。

乳幼児期は、基本的信頼感を育てる時期で、発達心理学でいうボウルビイの愛着形成という時期である。信頼関係ができてくると、人を信じる力をつけ、母という安全地帯があることを自覚して、そこから一歩飛び出すことができる。その基本的信頼関係感というものを育てるものの一つに、「絵本」があると思う。

III. 絵本の選び方

患者としてくる子どもたちも、年齢はバラバラであるが、絵本もたくさんの種類がある。絵本の情報もたくさんあり、その中で待合室にあった絵本をさがす。新聞の絵本の特集、月刊誌で毎月シリーズでとりあげられている絵本の記事、地域の読み聞かせ会のメンバーの推薦する絵本などから得ることが多い。購入にあたっては、実際自分が本屋に行って、立ち読みし選んでくる。そろそろ、スタッフで絵本の好きな人がでてきてくれてもよさそうなのだが、今のところ自分で選んでいる。

IV. 絵本の並べ方

絵本は大きさや形は様々で、本棚に並べるとなると表紙の絵がみえるようなディスプレイのできる本棚が望ましい。子どもたちが絵本を出

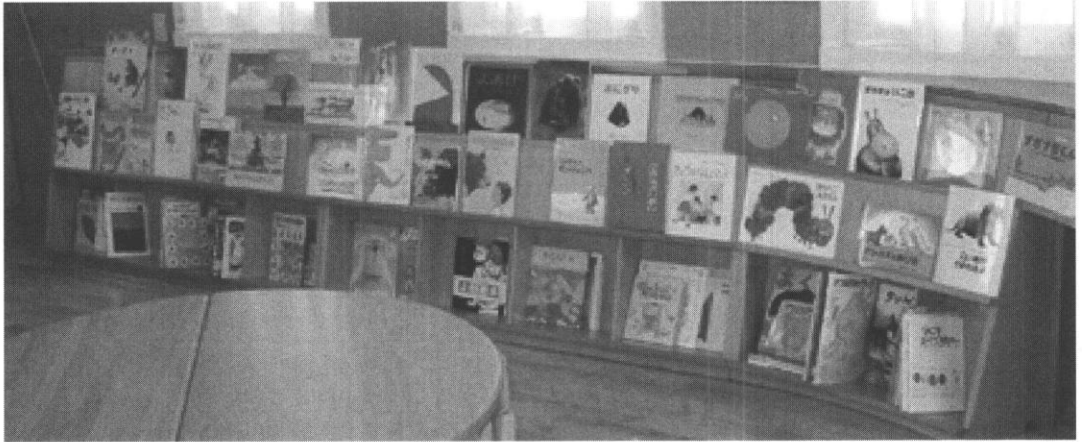


写真1 本棚と、絵本の並べ方  
表紙の絵が見えるように並べる。本棚は子どもたちが自分で選べるような高さ

し入れしやすい高さも考慮したほうがよい(写真1)。

絵本を本棚に並べかえることは楽しい。

① 季節を感じさせる並べ方

雪、雨、落ち葉など、春夏秋冬を絵本の絵から、内容から感じるもの。

② 行事に関するもの

お正月、節分、お雛様、七夕、クリスマスなど。

③ 主人公が動物

くま、うさぎ、きつね、とり、ねこ、いぬなどが主人公になっているもの。

④ シリーズもの

グリとグラ、ノンタンなど。

⑤ キャラクターもの

⑥ 昔物語

ももたろう、きんたろうなど

⑦ 作者別

⑧ 外国のもの

⑨ メッセージもの

いのち、ともだち、きょうだい、戦争などについて。

絵本を並べることは、並べる側のメッセージを託すこともできるし、「今週は、どんな絵本で、子どもたちを迎えようか」などと、絵本を手にする子どもたちのことを想像するとわくわくするものである。一日が終わると、朝並べた本が、本棚のあちこちにもどしてある。せっかく並べ

たのにも思うが、手にとって読んでもらっていることは確かである。こちらのメッセージが伝わったかどうかはわからないが、今後も、時々テーマ別にディスプレイし、「今月は、ちょっとだけいのちについて考えてみませんか。」「今月は、戦争について考えてみませんか。」と、小児科医として、親として、メッセージを絵本に託して並べたいと思う。

## V. 待合室の本

最近、「図書室」という待合室を増築した。予防接種の済んだ子どもさんたちが20~30分副反応の有無を確認する時間を過ごす空間にもなっている(写真2, 3)。もちろん、風邪などでこられたりしてもととの待合室で待っている子どもたちや、水痘などでこられて隔離室に入る子どもたちの部屋にも、絵本は置いてある。点滴をしている子どもさんには、おかあさんが、絵本を数冊読み聞かせている風景をみるのが、点滴を受けている子どもの表情からほのほのとした時間の流れを感じる。

## VI. 小さな読み聞かせの会(写真4, 5)

新しい待合室が完成してしばらくして、おかあさんの中で、この待合室を使って「読み聞かせ」をしたいという声があがってきた。8月はじめに、第1回の読み聞かせの会を行ったが、お父さんも一緒に家族が3家族あり、最初にし



写真2 図書館風待合室  
テーブルと椅子は子どもたちに合わせた高さ



写真4 おかあさんたちのお話  
子どもたちは前にのりだしてくる

ては、盛会であった。その後、月1回のペースで開いているが、回を重ねるごとに、参加している子どもたちが、絵本に集中するようになった。また、読み手のおかあさんが、かわるようになった。ドキドキしているのが手にとるようになるのだが、それをきっかけにして、絵本持参で参加されるようになった。

また、大きい子どもが、小さい子どもたちに絵本を読んでみる試みもしてみたが、読み手の子どもは、はじめはドキドキで声も小さいが、その次もしたいという。

少しずつであるが、会が地域へ入り込んでいっているようである。



写真3 予防接種後の様子観察  
時間まで絵本を読んで待っている

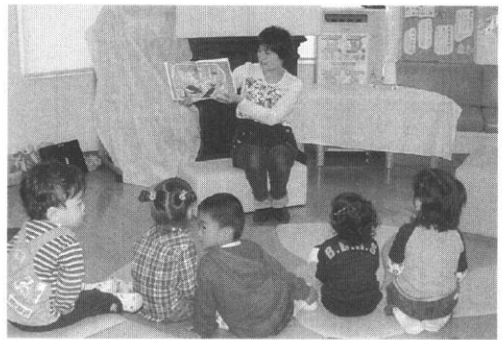


写真5 はじめて読み聞かせをするおかあさん

## VII. 読み聞かせの会での子育て支援

絵本の読み聞かせは、もちろん絵本に親しみ、よりよい親子関係を作ってもらうこと、地域にいる子育て中のおかあさんたちの輪を作ること、目的の一つであるが、小児科医として、地域の子どもの育児相談をする必要がある。外来でのわずかな時間で話せない分、このお話し会のあとの時間を利用して、予防接種、赤ちゃんの病気の話、地域で流行している病気、外来で気づいたことなど、時にはスライドで、時にはおかあさんたちとの井戸端会議的おしゃべりの中に入って、話すことをしている。この時間が貴重で、回を重ねるごとに、地域の小児科医としての自分と、おかあさんたちとの距離をより短くしているような気がする。

## VIII. おわりに

待合室は、絵本と出会い、その家族と小児科医の出会いの場である。絵本をとおして、患者

さんの御家族と小児科医との信頼関係が少しでも強くなり、子育て支援の一役に活かさればと思う。

この読み聞かせの会から1冊の絵本が誕生す

ることを夢みて、これからも、スタッフ全員で、絵本を通じて地域の子育て支援を行っていききたい。